

「SCRUM」を読む

1. 学級通信のスタイルと機能

学級通信にはいろいろなスタイルがある。

- ①文字情報を中心とした「説明文型」
 - ②文字よりも絵や図を多用する「ビジュアル型」
 - そしてこの SCRUM の様な③「新聞型」
- などが代表的な構成スタイルであろう。

「新聞型」の特徴は、正に「新聞型」という形式そのものにある。新聞というメディアは「速報性」「多様性」「伝達性」「批判性」「宣伝性」「対話性」を持つ。速報性は勿論、多様性とは経済、文化からスポーツまでを網羅する広い分野の情報を扱う。「伝達性」とは説明や解説など、読者の理解を促す機能を指す。「批判性」とは客観的な情報だけでなく、問いを促す「社会の木鐸」的性質を意味する。「宣伝性」とは、広告も含め広く情報を伝える機能を指す。「対話性」とは、読者の広場や投稿を扱うなど、読み手との交流があることを意味する。

また、新聞に含まれる情報の種類や表現方法は非常に多様である。文章があり、絵や写真があり、グラフや表も多用される。従って「表現の幅」が広くなるという特徴も持つ。

この「SCRUM」という学級通信が持つ魅力は、「新聞型」というスタイルによるところも大きい。新聞という表現の形式、フォーマットが持つ情報伝達機能というものがある。「学校の教育活動」「カリキュラム全体」を包含しつつ、連続して変化をする学級に情報を発信していく上で、「新聞型」という型そのものにメリットがある。そして、この「SCRUM」を読み解いていくと、「学級経営」にはどの様な手法、指導、活動が必要なのか。また、どの様な時期に、どの様な情報を発信することが必要なのかが見えてくるだろう。日々の学びに関する内容もあれば、危機管理や問題提起のため、緊急性を帯びた内容の号もある。そして、感動の「卒業号」まで、中西学級と共に子どもの成長を楽しみつつ「SCRUM」を読み解いて頂きたい。

2. SCRUM が持つ情報の量と質

「SCRUM」を一目見た時に、読者の先生方は何を感じたであろうか。まずは、「密度の高い情報量」と「発行頻度の高さ」「表現内容と方法の多様さ」を感じたのではないだろうか。忙しい時間の合間を縫って、学級通信の材料を集めることは困難な様にも見える。だが、授業中の子どもの姿や、子どもの学習製作物は教師が毎日目にしている情報だ。新聞記者の様に他の場所に取材に出かけて行かなくとも、「目の前の学級の中」に学級通信の素材が溢れている。【授業の目利き】、【子どもの目利き】となっていけば、子どもの実態や課題を見抜く目は益々磨かれて行く。

学級通信の内容は「教科学習の内容に関するもの」「学級の人間関係に関するもの」「様々な行事の説明・ガイド&振り返り」「学級や学習の今の状況をフィードバックしてメタ認知させるもの」「保護者への依頼と問題提起」「子どもの認めと成長の共有」「意欲の喚起と叱咤激励」など、多様である。

運動会や修学旅行、学習発表会などの行事では、その行事向かう頭と心の備えを学級通信に盛り込む。行事の持つ教育効果や体験の意味を、子どもに語りかけつつ共に高めて行く。そして、行事が終われば、その内容を振り返って価値づける。こうして、事前―事後を学級

通信で繋ぐ。その場限りのイベントではなく、行事が繋がりのある単元性を帯びて子どもにとっての学びの価値を高めて行く。そのために学級通信が活用されている。

しかし、最も重要な点は「子どもに関する情報を要にする」ということだ。それは、全ての子どもが「自分に関係がある情報」だと感じ、保護者にも同様の印象を与えることになる。

「学級通信」を書く過程で、授業中の子どもの姿を思い出し、言葉に置き換えて行く。そのアウトプットの中で「あ、あの子の本当の思いはここにあったのだ」と気づく。そして、その気づきを学級通信にしたためていく。学級通信作成を通して、より深く子ども一人一人が見えてくることになる。

更に、説教と説明だけに閉じない豊かで変化に富んだ内容が、次の学級通信への期待を高めるのである。ワンパターンでは、優れた正論を書いても読者は目を通してくれなくなってしまふ。子どもが他の子どもの学習活動の良さを相互評価し、その「良さ」を一覧にして紹介している号もある。これは、**学級の中で子どもが相互に支え合う「浮力」を生み出す効果**を持つ。子ども相互が「何となく感じていること」を言語化して、学級通信の中に固定化して情報を共有する。こうして、学級が支え合うより「したたかな学級」に成長して行くのである。支え合う学級では、授業での対話的な学習や行事などでの協働的活動でもより効果的に展開されるであろう。

子どもの個性は一人だけでは表れてこない。一人だけでは「孤性」に過ぎない。学びや育ちのテーマを共有しつつ、そこに向かう子どもの姿は一人一人が違っている。その違いを認め合うつながりが真の個性を育てる。「SCRUM」の表紙に描かれた似顔絵は一人一人表情が異なっている。こうした違いを繋いでいく上で、「学級通信」は果たす役割は大きい。

3. 豊かな内容と確かな信念

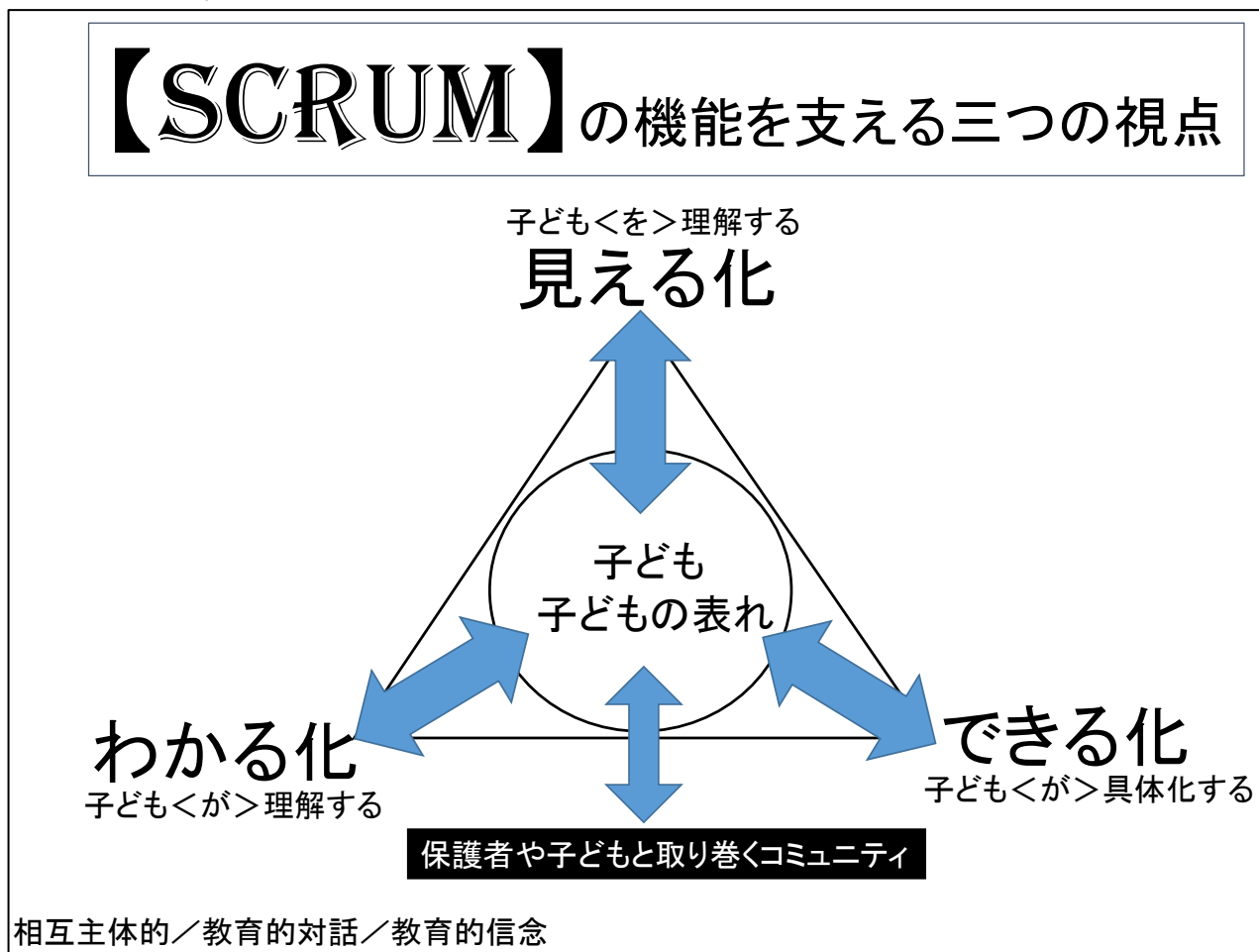
「SCRUM」は確かに豊富で幅広い情報を掲載している。しかし、この一冊全体に共通する、テーマ性も強く感じることができる。それは、教師の教育観であり、学級観であり、人間観である。中西良介個人の「哲学」と言ってもよいだろう。それが「何か」は読者が読み取って欲しい。そして、自分の学級経営に生かせる情報も多い筈だ。冒頭で、学級通信には「スタイル」があると書いた。だが、その根は教師の「スタンス（姿勢）」が支えている。子どもに向き合うスタンス、学級に向き合うスタンス、そして自分に向き合うスタンスが学級通信に表れてくる。

時には子どもにとって、厳しい内容も書かれている。しかし、教師のストレス発散の「お小言」に閉じず、どうしたら更により成果が出せるのか、子どもと教師が課題を共有するスタンスを取る。こうした教師のスタンスは、子どもにも保護者にも伝わる。教育に対する情熱も大事だが、子どもの育ちと教育に向かうスタンスが伝わった時、子どもも保護者の「聞く耳」を育てることができる。学級通信という間接的な情報媒体を効果的に用いることで、多様化する価値観を一つの理念に結び付けていると言える。こうして、**育ちに向かうベクトルを共有することで、保護者を含めた学級づくりが進んで行くのである。**

更に「SCRUM」にはその機能を支える「三つの視点」がある。それが「見える化」「わかる化」「できる化」という視点だ。「見える化」は子どもの表現や姿から、その本質を「概念化・言語化」ということ。子どもの行動や表情は一瞬で次の学びのシーンへ吸収されてしまふ。その場を、言語として表現することによって「見える化」する。

「わかる化」は、子どもの理解という視点から情報を構成するということ。子どもが「わかる様に」表現し、する、できるという学びの具体に繋いでいく。「できる化」とは前者二つの関係の中で、子どもが行動や活動、発言など「具体化」していくことを意味する。子どもを見とり、情報として発信し、子どもがその情報を元に思い・考えて自らの行動に反映さ

せて行く。その子どもの様子を教師は更に「見える化」し、学級通信として発信して行く。「教師の願い」「子どもの姿」「子どもの姿の変容」が繋げるために「見える化」「わかる化」「できる化」が連動しているのだ。こうした「三つの視点の対流」が「SCRUM」の教育効果を支えている。



尚、この視点は何のスタイルの学級通信づくりにも共通した視点だとも言えるだろう。このどこか、一つの要素が欠けても、「魅力的、継続的、効果的」な学級通信を発信することは難しい。

4. 学級通信は自分自身の思いの「写し」

「星の王子様」を書いた、サンテグジュペリは「交換」という思想を説いた。人は、自分が心血を注いで関わった対象と、自分の魂を「交換」することで自分を越えた存在になって行くということを意味する。画家は心血を注いで描いた絵と魂を交換することで、己の永遠を創りだす。この学級通信も、書き手の魂と交換の末出来上がったのであろう。そして、「SCRUM」に育てられたと感じている教え子や卒業生も多い筈だ。人間教育とは「人と人」の間でこそ起きる。はじめて出会った他者が仲間になり、「在る学級」が「成る学級」に育っていく。その中で、教師と子どもの関係も変わり、子どもと子どもの関係も変わり、保護者と教師の関係も変化する。その変化は、時代を越えても変わる事がない「信頼や感謝や感動」を生み出して行く。この様な、子どもと子ども、子どもと教師、保護者と教師の関係を変化させて行く効果も「SCRUM」は持っている。「SCRUM情報」が、子どもを中心としたコミュニティの関係性を創造的で協力的な方向に変化させて行く。この「人と人」の関係性の変化を生み出している点も、「SCRUM」の持つ教育効果だと言える。

人と人が学ぶ学校という場において、人と人の関係を育てる触媒的情報は重要な価値を持つ。この学級の子ども達も「SCRUM」があるか否かで、育ちの質が大きく違っていたであろう。

「学級通信」は、子どもにとっても記録になるが、教師にとっても自己の成長の記録になる。教師と子どもは相互主体として互いに学びを構成し合っている。子どもは社会参加に必要な資質・能力を磨きつつ学び、教師はプロ教師としての技の熟達化を目指して共に学んでいるのだ。学級通信とはそうした「共学」の記録でもある。故に、「質の高い学級通信を発行する」ということは、教師が己の成長を子どもの姿で表現していくことでもある。授業の腕前を上げるには、その対象となり前提でもある「子ども」を洞察する能力の洗練が不可欠だ。学級通信は「子どもの育ちの観察記録」でもある。よって学級通信を書くということ自体が、子どもを洞察する能力を伸ばすことにつながる。

そして、「SCRUM」は教師の一方的な思いを伝達するためだけに書かれているのではない。その証拠に子どもとの対話的な内容が随所に見られる。子どもの発言、振り返りの内容、学習の中で見えた行動などについて、子ども達に語りかけ、問いを求め、ある時は絶賛をする。その「教育的な対話」のやり取りの中に、教師の目指す授業像や子ども観があり、子ども達が育っていく具体の姿が生まれてくる。現在の教師の仕事は実に多忙である。だからこそ、子どもの育ちを十分に感じ取り、見つけた課題に対応して子どもの育ちを実感して欲しいと思う。

若手の教師がすぐに「SCRUM」に追いつくことは容易ではないかもしれない。だが、「SCRUM」のネタと精神を真似つつ、それを越える学級通信づくり、学級づくりに挑戦することはできるはずだ。そして、なんといっても「学級通信」をアウトプットし続けることが大事だ。【時間】【自分】【状況】という三つの「J」と向き合いながら、まずは第一号を書いてみよう。挑戦の価値はある筈である。

梶浦 真